平成 27 年度 国際交通安全学会

研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式

＜日時＞
平成 28 年 4 月 8 日（金）13:00
（12:30 受付開始）

＜場所＞
経団連会館 2F 経団連ホール

公益財団法人 国際交通安全学会
International Association of Traffic and Safety Sciences

ごあいさつ

春暖の候、各位におかれましては益々ご清栄のことと、心よりお慶び申し上げます。また、日頃から当学会の活動に格段のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

高質な交通とその文化は、産業・社会活動の発展に寄与するとともに生活の便利さと豊かさを支え、急速に進む情報化社会においても重要な役割を果たしています。とりわけ自動車交通の発展は、公共的・私的なモビリティの質的・量的な拡大をもたらしています。

しかし、その一方で、交通事故、環境汚染、資源消費など多くの深刻な問題を抱え、また、高齢化や都市や地方の衰退といった社会問題も喫緊の課題となり、持続可能な優れたモビリティ社会の実現に向けたグランドデザインの理念構築、実践的問題解決のための調査研究および提案、継続的な教育支援活動などが求められています。

国際交通安全学会は、交通とその安全・安心のために学際的かつ国際的な視点から取り組むことが重要な責務と考え、研究調査活動を進めてまいりました。今後とも、関係各位の変わらぬご支援、ご協力を賜りますことを切にお願い申し上げる次第です。

この度、当学会定例の研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式を催すこととなりましたので、皆様に御案内申し上げます。ご多用中とは存じますが、万障御繰り合わせの上ご出席を賜れば幸甚に存じます。

公益財団法人 国際交通安全学会
会長 武内和彦

平成 27 年度 国際交通安全学会
研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式

スケジュール

12:30～	受付	経団連ホール前(2F)
13:00～16:25	**研究調査報告会**	経団連ホール(2F)
16:45～18:00	**学会賞贈呈式**	経団連ホール(2F)
18:10～	**意見交換会**	国際会議場(2F)

内容

研究調査報告会では、平成 27 年度に実施した研究調査プロジェクトの中から、特に成果が認められたテーマについて報告いたします。

学会賞贈呈式は、交通と安全に関して多大な貢献が認められた業績、優れた著作、および優秀な論文について、国際交通安全学会賞として顕彰いたします。

平成 27 年度 国際交通安全学会
研究調査報告会

プログラム

13:00	開会のご挨拶 会長 武内 和彦
13:05	研究調査部会企画委員会挨拶 研究調査部会企画委員会委員長 中村 文彦
13:10	【テーマ①】 こどもの交通モビリティと交通安全教育： 適用制度の展開および拡張の可能性に着目した学際的研究 プロジェクトリーダー 吉田 長裕
13:55	【テーマ②】 睡眠呼吸障害早期発見・早期治療の普及推進を目指した学際的研究 プロジェクトリーダー 谷川 武
14:40	[休憩]
14:55	【テーマ③】 自動車の自動化運転： その許容性を巡る学際的研究 プロジェクトリーダー 今井 猛嘉
15:40	【テーマ④】 香川研究 －事故発生要因の分析と対策への提言－ プロジェクトリーダー 赤羽 弘和

平成 27 年度 研究調査報告会
報告プロジェクト紹介

【テーマ①】

こどもの交通モビリティと交通安全教育：適用制度の展開および拡張の可能性に着目した学際的研究

本研究は、近年の道交法の改正や、交通分野における安全、環境問題への対応、国際交通安全学会における調査研究や海外調査の経緯等を踏まえ、免許取得前の障がい児を含むこどもの交通モビリティと交通安全教育に着目し、その適用制度の展開および拡張可能性を明らかにすることを目指したものである。

まず実態把握のために、国内の子供の交通事故死傷者数を学齢別にみたところ、徒歩に関しては学齢とともに減少傾向にある一方で、自転車に関しては逆に増加傾向にあることがわかった。次に、諸外国におけるこどもの交通安全教育制度について、フランスおよびオランダについて調査を実施した結果、交通安全教育機会の一部義務化およびその教育証明書制度、さらに運転免許制度との連携制度等が既に実施されており、また、障がい児に対する交通安全教育についても事例を収集することができた。

以上を踏まえ、国内においてこどもを対象とした自転車交通安全教育の実施関係機関や団体にヒアリング調査を行い、国内における自転車の交通安全教育に関する現状と課題の把握を行った。また、教育内容を項目別に比較することで教育実施団体間の特徴を明らかにすることができた。

プロジェクトリーダー
吉田 長裕（大阪市立大学大学院工学研究科 准教授）

メンバー

小川 和久（東北工業大学教職課程センター 教授）
北村 友人（東京大学大学院教育学研究科 准教授）
永田 潤子（大阪市立大学大学院創造都市研究科 准教授）
長谷川 孝明（埼玉大学大学院理工学研究科 教授）
蓮花 一己（帝塚山大学心理学部 教授）
大谷 亮（（一財）日本自動車研究所 主任研究員）
藤江 徹（（公財）公害地域再生センター あおぞら財団 事務局長・研究員）
藤山 拓（Centre for Transport Studies (UCL) Senior Lecturer）
矢野 円郁（神戸女学院大学人間科学部 准教授）
松原 淳（（公財）交通エコロジー・モビリティ財団企画調査課 課長）
高橋 輝好（大阪市東京事務所 担当係長）

【テーマ②】

睡眠呼吸障害早期発見・早期治療の普及推進を目指した学際的研究

今年度の本プロジェクトの主な成果は、以下の通りである。

わが国の生命保険会社における治療中の睡眠時無呼吸症候群（SAS）患者の保険引き受け基準等は、SAS 早期発見・早期治療に対して望ましい対応とは言い難い会社が多いことが明らかになった。

独立行政法人自動車事故対策機構(NASVA)の研修受講者、特定診断受診者において、中等度以上の重症度の睡眠呼吸障害があっても主観的眠気が強い者は少ないことを明らかにした。

某自治体男性職員において、睡眠呼吸障害の重症者ほど肥満、高血圧が多く、特に肥満者かつ睡眠呼吸障害罹患者で高血圧が多いことが示された。また、睡眠呼吸障害が重症化するにつれて客観的眠気が主観的眠気とともに高くなることが示された。

某睡眠専門医療機関において、SAS に起因すると考えられた事故が SAS 患者の約２割に認められた。また、複数回事故を起こしながら原因不明と本人が思っている重症潜在 SAS 患者が多く存在する可能性が示された。

プロジェクトリーダー
谷川 武（順天堂大学医学部 教授）
メンバー
今井 猛嘉（法政大学法科大学院 教授）
岩貞るみこ（モータージャーナリスト）
太田 和博（専修大学商学部 教授）
高橋 正也（（独）労働安全衛生総合研究所 上席研究員）
守谷 俊（自治医科大学医学部 教授）
蓮花 一己（帝塚山大学心理学部 教授）
江口 依里（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 助教）
野田 愛（順天堂大学医学部 准教授）
丸山 広達（順天堂大学医学部 助教）
和田 裕雄（順天堂大学医学部 准教授）

【テーマ③】

自動車の自動化運転：その許容性を巡る学際的研究

自動車の自動化運転には、人為的ミスによる交通事故の大幅削減、移動時間の多様な利用や高齢者等の移動性向上等の可能性が秘められている。この可能性は、自動車に乗車している者が、ハンドル、ブレーキ等を何ら操作する必要がない場合に、極大化する。しかし、人身事故等の危険な状況が予見される場合、人間が自動車を操作して（オーバーライド）当該危険を回避することが、現行法の下では要請される。すなわち、自動走行モードで走行中の自動車（ないしそのためのシステム）が乗員にオーバーライドを要請し、乗員がこれに応じて危険回避する態様の走行（Level 3）は許容されるが、完全な自動走行（Level 4）は違法である。

そこで、現時点では、Level 3 に整理される走行を公道等で実験し、当該走行に起因する問題点（事故回避の態様、事故に係る責任帰属等）を整理しつつ、当該走行が期待される地域の実情を踏まえた交通体系の整理が望まれる。これと同時に、国際的動向を踏まえ、Level 4 が許容された場合の論点（例えば、自動化運転に係る車両とその乗員を優先的に保護するため、他車に衝突し、被害を転嫁する選択が、日本の交通文化と調和するのか）の検討も、不可欠である。

プロジェクトリーダー

今井 猛嘉（法政大学法科大学院 教授）

メンバー

岩貞るみこ（モータージャーナリスト）

木林 和彦（東京女子医科大学医学部 教授）

久保田 尚（埼玉大学大学院理工学研究科 教授）

長谷川 孝明（埼玉大学大学院理工学研究科 教授）

森本 章倫（早稲田大学理工学術院 教授）

横山 利夫（（株）本田技術研究所 四輪 R&D センター 上席研究員）

松村 良之（北海道大学 名誉教授）

矢野 雅文（東北大学 名誉教授）

岡村 和子（科学警察研究所交通科学部 交通科学第二研究室長）

小川 貴裕（弁護士法人アディーレ法律事務所 弁護士）

菅沼 直樹（金沢大学新学術創成研究機構 准教授）

西田 泰（（公財）交通事故総合分析センター 研究第一課長）

松浦 常夫（実践女子大学人間社会学部 教授）

三浦 清洋（（公社）日本交通計画協会 企画室長）

八幡 有信（八幡マネジメント研究所）

【テーマ④】

香川研究　－事故発生要因の分析と対策への提言－

本プロジェクトの目的は、人口当たり交通事故死者数がワースト高位である香川県に実効的安全対策を提言し、かつ同策定過程を普遍化して他地域に適用することである。

信号交差点のコンパクト化前後のビデオ観測により、右左折時の速度、ショートカット、走行位置のばらつき抑制効果が検証・確認された。

運転者の安全意識に関して、免許更新時講習受講者への追加アンケートから、講習種別間差とそれらの県内地域性が確認され、各講習受講者の特徴をふまえた教育の重要性が指摘された。さらに、交差点のコンパクト化などによる運転挙動のばらつき抑制が、運転者のリスク回避・同受容行動の改善に寄与すると指摘された。

交差点間での横断中事故の約20%が、小売り施設周辺で発生していることを確認した。また、中央分離帯開口部における散発的横断事故に対応した閉鎖措置には、実施状況にばらつきがあった。これは安全対策施工に合意形成が肝要なことを示唆している。

プローブデータにより500m四方の生活道路網毎に評価した事故リスクが、幹線道路より約2倍高いことを示し、その増大要因として新規開発地域、学校、幹線道路との交差数を特定した。

プロジェクトリーダー

赤羽 弘和（千葉工業大学工学部 教授）

メンバー

大口 敬（東京大学生産技術研究所 教授）

土井 健司（大阪大学大学院工学研究科 教授）

中村 英樹（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）

蓮花 一己（帝塚山大学心理学部 教授）

喜多 秀行（神戸大学大学院工学研究科 教授）

小川 圭一（立命館大学理工学部 准教授）

塩見 康博（立命館大学理工学部 准教授）
治部 哲也（関西福祉科学大学健康福祉学部 准教授）
中井 宏（東海学院大学人間関係学部 講師）
正岡 利朗（高松大学経営学部 教授）
森津 誠（大阪国際大学 名誉教授）
山口 直範（大阪国際大学人間科学部 准教授）
渡部 数樹（名古屋大学大学院環境学研究科 研究員）
青木 洋（交通安全コンサルタント）
秋山 尚夫（LLP.交通運用研究所 代表）
松本 晃一（西日本高速道路ファシリティーズ（株） 常務取締役）
山田 敬二（国土交通省四国地方整備局道路部 道路情報管理官）
兵頭 英人（国土交通省四国地方整備局道路部道路管理課 課長）
清川 喜博（国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所 所長）
藤澤 一仁（香川県危機管理総局 参与）
赤松 健司（香川県危機管理総局くらし安全安心課 課長）
安西 慎（香川県土木部道路課 課長）
岡田 知春（香川県警察本部交通部 参事官兼交通企画課長）
今田 英朗（香川県警察本部交通部交通規制課 課長）

平成 27 年度（第 37 回）
国際交通安全学会 学会賞贈呈式
式次第

会長挨拶　会長 武内 和彦

選考経過報告　褒賞助成部会企画委員会委員長 中村 英樹

学会賞贈呈

◇業績部門

「人流、物流、そして地域活動を効率化する協働
－ヒトものバスのコンセプトと導入－」
ヤマト運輸株式会社
岩手県北自動車株式会社

「人と公共交通を優先した交通まちづくりへの挑戦
－四条通道路空間再配分整備事業－」
京都市

◇著作部門

「交通インフラ経営のグローバル競争戦略
－国際競争力強化に向けた国家戦略の視座」
中野 宏幸

「サインシステム計画学 公共空間と記号の体系」
赤瀬 達三

◇論文部門

「Is 30 km/h a ‘safe’ speed? Injury severity of pedestrians struck by a vehicle and the relation to travel speed and age」
Höskuldur R.G. Kröyer

祝辞　警察庁長官 金髙 雅仁
内閣府大臣官房審議官 安田 貴彦

謝辞　中野 宏幸
赤瀬 達三
Höskuldur R.G. Kröyer

業績紹介　ヤマト運輸株式会社
岩手県北自動車株式会社
京都市

閉会挨拶　専務理事 鎌田 聡

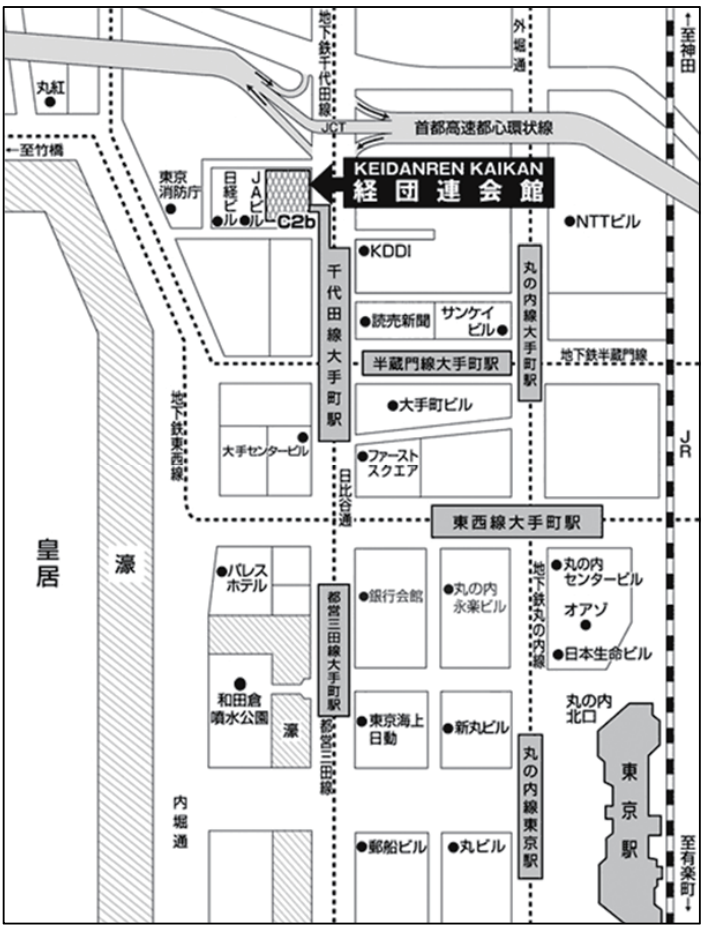
（敬称略）

＜会場案内図＞

経団連会館

東京都千代田区大手町 1-3-2

東京メトロ「大手町」駅 C2b 出口直結



＜お問い合わせ先＞

（公財）国際交通安全学会 事務局

Tel: 03-3273-7884

E-mail: mail@iatss.or.jp

研究調査報告会: 松山、谷川、梶田

学会賞贈呈式: 松山、谷川、廣谷